

どろかれて、こしをれひとつ、かしこの机の下にかしこまりぬ。家の業世にかしこく、國人其父子の徳によりて、年ふかくやまひもまのあたり、こゝろよき數なん多く侍れば、よろごひ身につみ家にさかえ、百とせの賀をまうけられん事、必なるべければ、時しも暮ゆく春、四方の園にひらけそめし桃の花の色こく、寔に空さへ醉るが如きひかりに、かの桃源を思ひよろこぶなるべし。

たつね入も、さく谷や百とせの花を契りてふかき色かな

井上權佐
藤政寛 漫詠

忠直君いそぢの賀をことぶきて

橋 忠 敬

さぞなしる天の心を花の宿

一、寺西意閑の事

今茲庚申寺西三郎平入道寒江享年八十八歳。家居して無恙。四月廿日招予對話す。老筆の舛更に無之、其祖意閑の事を語て云。

意閑若年の時は太閤に奉仕し、駿河守と稱し後備中守と稱す。其後浪人いたし意閑と稱し隠居仕候。常に瑞龍公御懇意被成候故、御奉公に罷出候様に被仰遣候處、最早主取仕

候心懸無御座候故、何方より被仰越候ても、辭退仕候旨申上罷出候。重て被仰下候は、平生草花數寄仕候。幸能州津向村邊に能き土地候。是へ罷越慰候は、可宜旨、再三御意被成候に付、隨御意候て罷越候處、於津向村八町四方の所被下置候。海邊に付漁獵の遊樂も有之候。其後御鼻紙代と被成、千五百石被下候。御知行被下候上には、只居申は無勿躰儀に奉存候。相應の儀相勤度旨申上候處、金澤御城の内東丸へ折節可罷出旨被仰出、一月に一度程罷出候。三日斗動番仕候ては三月も罷出、九十三歳にて相果候。其年迄能州にて雲雀鷹野仕候。醫術も有之候や、九十三の夏自身脈を診し、診味ことの外違ひ申候。今年は死可申候。醫者共何の異變も無之旨申候は、皆下手共にて脈を不存候旨申候。果して其年相果申候。存生の内に嫡子新七へ千石被下、死後に五百石は三郎平父へ被下候。大聖寺より意閑子共の内、一人被召使度旨被仰下、則一人何某を上げ申候處、三百石被下今以て其子孫相勤候。淡路守様より其後同事に被仰下候へ共、最早せがれ無之、孫の内指上げ申候處、是も三百石被下今以て其子孫罷在候。金澤迄にても無之、富山・大正持にも意閑子孫被召使候旨申聞候。

可觀小説卷四十四

一、琉球王答太閤秀吉公書

承聞日本六十餘州拜堂下塵。歸服幕下。加之及高麗南蠻亦僣威風。天下泰平。橐弓撫四夷之謂乎。吾遠島賤陋小國雖難及一禮。嶋津義久公使大慈寺西院和尚蒙仰候條。差上桃庵和尚、明朝之塗物。當國之壺。輕薄之進物。錄于別楮。爲遂一禮也。恐惶不宣。

萬曆十七年仲春二十有日

琉球國王拜上

日本關白殿下

一、朝鮮兩王子與加藤清正書

兩王子臨海君。順和君。兩府夫人。陪臣長漢君。上洛君。行護軍大將南兵使等。自壬辰年七月二十四日被虜。日本大將軍主計頭清正。入城相見。即加禮遇。一行下人并賜兵糧。撫恤頗至。又稟于關白殿下。到釜山海。還許於還京城。其慈悲如佛。眞箇日本中好人也。既素聞關白殿下。雄傑無双。四隣皆畏之。且善於分別。□待隣國。自王子諸臣。稍存舊意。慙其渡海。使復于京。其恩厚與此海俱深。一行人。其敢或忘。

後日若對日本及計頭。復發難□少有背負之意非人。天地鬼神共知之矣。修好之日。通書寄情事。

萬曆二十一年六月初二日

行 護 軍
兩 兵 使
長 湊 君
順 和 君
臨 海 君

一、伊藤蘭嶋の詩二首

行雲逝不返。露水難再收。當時叢臺中。專籠萬不愁。宮人比積薪。新者却居先。千年入宮妬。長使百憂煎。今爲走卒婦。焉在誇茂年。貧苦自有失。不比昔日捐。

己未七月與諸友賦邯鄲夫人嫁爲厮養卒婦

漁陽上谷古幽州。千歲壯心易水流。欲別驕翻五花馬。陣雲已歿紫金鞦。

邊地少年子

右二首伊藤才藏號蘭嶋者去年之作。

一、古文苑張琳序抄

甚慕古奧。則削去語助之詞。而不可以句。覲然自負其名。